



Data

監督: ニキ・カーロ
 原作: ダイアン・アッカーマン『ユダヤ人を救った動物園 ヤンとアントニーナの物語』(亜紀書房)
 出演: ジェシカ・チャスティン/ダニエル・ブリュール/ヨハン・ヘルデンブルグ/マイケル・マケルハットン

👁️👁️ みどころ

『シンドラーのリスト』(93年)のオスカー・シンドラーはユダヤ人を自社で働かせることによって、『杉原千畝 スギハラチウネ』(15年)の杉原千畝は「命のビザ」を発給することによって、それぞれ多数のユダヤ人の命を救ったが、ポーランドのワルシャワには邦題通り「ユダヤ人を救った動物園」が！

そこで命を救われたユダヤ人は約300人だが、そこでの緊張感を強いられた「日々の業務」を見ていると、この夫妻の決断と行動力に大きな拍手を送りたい。そして同時に、もし自分がその立場に置かれていたら・・・？それも、きちんと考えたい。

さらに考えるべきは、ひょっとして今も同じような「開戦前夜」かも？ということ。ワルシャワの動物園はナチスドイツの侵攻に蹂躪されたが、もし朝鮮半島有事となれば、日本は・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■イントロダクションは？■□■

公式ホームページによれば、本作の「イントロダクション」は次の通りだ。

ユダヤ人 300 名を動物園の地下に匿い
 その命を救った、勇気ある女性の感動の実話。
 本当に大切なものを見つめる心、
 命の輝きを描いた映画史に刻まれる、珠玉の名作が誕生。

■□■これが開戦前夜？この動物園の風景は？■□■

本作は、『ユダヤ人を救った動物園 アントニーナが愛した命』という邦題の通り、「ユダヤ人300名を動物園に匿い、その命を救った勇氣ある女性の感動の実話」。そして、ダイアン・アッカーマン原作による、<BASED ON A TRUE STORY>を映画化したもの。近時「ナチスもの」「ホロコーストもの」の名作は多く、先日は『否定と肯定』（16年）を観て大いに感動したばかり。今日はそれに続く「感動予想作」だが、『否定と肯定』のような知らないことばかりの映画でなく、最初からそのストーリーは想像できる映画。

ちなみに、ナチスドイツがいきなりポーランドへの侵攻を開始したのは1939年9月1日だが、その直前のポーランドの首都ワルシャワの状況は・・・？当時ワルシャワに、ヨーロッパ最大の規模を誇る動物園があったことは知らなかったが、冒頭毎朝の日課の通り、園内を自転車で巡り、動物たちに声をかけて回るアントニーナ（ジェシカ・チャステイン）の姿は幸せそう。夫のヤン（ヨハン・ヘルデンブルグ）も政治、外交、軍事面の不安は感じつつ日々の仕事に精を出していたが、「開戦前夜」って、こんなもの・・・？

ちなみに、米中戦争は先の話だろうが、北朝鮮の暴発はすぐ近くに迫っているはず。すると、今はある意味での「開戦前夜」だが、それが分析されるのは今から何年も何十年も先のこと・・・？

■□■「ゲッター」の中は？あの名作とは異なる視点から■□■

『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（99年）は、ナチスドイツの占領下にあったポーランドのある町の、ユダヤ人居住区、「ゲッター」での物語。そのテーマは、ソ連軍（解放軍）がわずか400km先の町まで侵攻しているというゲッターの住人たちにとって「生きる希望」に直結する貴重な情報だった。しかし、ゲッター内にそんな情報が流れていることを聞きつけた「ゲシュタポ」（秘密警察）たちは・・・？（『シネマルーム1』50頁参照）

また、『戦場のピアニスト』（02年）では、ワルシャワのラジオ局でショパンを演奏していたユダヤ人のピアニストが、ゲッターでの生活を余儀なくされながら、脱出後、隠れ家の中に身を潜めて隠れ続け、数々の危機を乗り越え、戦後またピアニストとして生涯を全うしたという奇跡的な物語が感動的に描かれていた（『シネマルーム2』64頁参照）。これらの名作では、それぞれゲッター内部の様子がリアルに描かれていたが、さて本作に見るワルシャワに作られたゲッターの中は？

ゲッター内では、理不尽な少女のレイプ事件もあったはずだ。そんなニキ・カーロ監督の女性らしい視点から、ゲッター内に入ったヤンが、ドイツ兵に拉致される1人の少女を目撃するシーンも登場する。その少女がその後を受ける運命も含めて、さて、ゲッターの

中のユダヤ人たちの実態は？本作ではそれは直接描かれず、あくまでポーランド人で動物園の経営者であるヤンやアントニーナの視点からゲットー内の実態と、その中でのユダヤ人の生活が描かれる。したがって、本作では、『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』や『戦場のピアニスト』とは異なる視点と私たちの想像力を駆使することによって、しっかりゲットーの中を観察したい。

■□■動物たちの命は？動物園の存続は？ヤンたちの狙いは？■□■

ナチスドイツ軍の侵攻によってヤンが経営する動物園が閉鎖されたのは当然だが、そこで第1に問題になるのは動物たちの命、第2にヤンたちの生活をどうするかだが、さて、**<BASED ON A TRUE STORY>**である本作に見るその展開は？

動物好きやその研究者はポーランドに限らず、ドイツにもいるもの。ヒトラー直属の将校で動物学者であるヘック（ダニエル・ブリュール）は、希少価値のある動物の繁殖実験のため動物園を存続させたいとの狙いを持っていたから、ヤンが動物園で豚を飼いたいと申し出ると、両者の利害が一致し、たちまちOKに。たしかに、広い動物園を閉鎖してしまうのはもったいない。そこがドイツ軍の食料になる豚の飼育場になるのなら、そりゃグッドアイデア。てなワケで、多数の動物たちの命は奪われてしまったものの、動物園自体は豚の飼育場として存続することが決まったから、ヤンとアントニーナはひと安心。他方、豚の餌はどうするの？それは、ゲットー内で生活するユダヤ人たちの残飯を使えば一石二鳥。なるほど、なるほど……。その結果、ヤンはヘックからゲットー内に入る通行証をもらい、「日々の業務」に従事したが、さて、そこに秘めたヤンとアントニーナの狙いは……？

■□■ヤンの仕事は？匿われたユダヤ人たちは？■□■

『シンドラーのリスト』（93年）のオスカー・シンドラーはユダヤ人を自社で働かせることによって、『杉原千畝 スギハラチウネ』（15年）の杉原千畝は「命のビザ」を発給することによって、それぞれ多数のユダヤ人の命を救った。杉原千畝が「命のビザ」を発給したのは、合法か違法かギリギリの判断の中だったが、いざその「発給業務」を開始すれば、その後は加速度的にそれが早まったのは当然（『シネマルーム36』10頁参照）。それと同じように、今やヤンの日常業務は、車でゲットー内に入るたびに持ち帰る残飯の中に2、3人のユダヤ人を潜り込ませて動物園内に運び入れ、動物たちが殺されて空になった地下の檻の中に彼らを匿うことになっていたが、その量は？スピードは？なるほど、これはうまく考えたものだ。しかし、地下に匿ったユダヤ人たちの脱出ルートはどうするの？それはあなた自身の目で確認してもらいたいが、この日常作業は観客席から見ているだけでも大変。だって、昼間にはヤンの動物園や家の中に人の出入りがあるから、地下のユダヤ人たちは声を出すこともできず、夜になるとやっと家の中に入って休息する有様だったのだから。もちろん、そんな息の詰まる、危険いっぱい生活でも、ゲットー内にい

るよりはマシ。そう考えていたヤンとアントニーナが日々の作業を続けているうちにその数はどんどん増え、最終的に救出したユダヤ人が約300人になったわけだからすごい。しかし、こんなシステムが全くバレずにずっと続くの？そこが心配だが・・・？

■□■外でのヤンの日常業務も大変だが、内を守るのも大変！■□■

動物園の施設をうまく活用しながらユダヤ人の救出を考えたヤンのアイデアは秀逸。しかし、そのアイデアに沿って動物園の地下に潜り込みながら、脱出を目指すユダヤ人たちも大変なら、ゲットーと動物園を車で往復し、その日常業務に従事するヤンも大変。さらに、動物園と家の中を守り続けるアントニーナも大変だ。地下のユダヤ人たちに危険を知らせたり、逆に安全になったことを告知するためアントニーナが考えたアイデアは、ピアノを弾くこと。映画の中では具体的に説明されないが、きっとどんな場合にはどんな曲と決めたのだろう。それによって一糸乱れぬ行動が取れば問題ないが、天井板一枚、壁一枚を隔てただけの空間内だから、ユダヤ人たちの話し声はもちろん、怪しげな音が聞こえただけで、全員が危険にさらされるのは必至。しかし、子供が急に泣き出したり、大人だったくしゃみをすることもあるのでは・・・？そんな心配をしていると、案の定・・・。

他方、冒頭のシーンで見ると、動物園内を自転車で走り回っているアントニーナは、一人息子がいるものかなり魅力的な女性。同じように動物好きなヘックにとって、彼女は当然好みのタイプだろう。すると、事実上ヘックの支配下にある動物園内で、アントニーナが毎日のように動物園の管理と希少動物の繁殖のためという名目で顔をつき合わせていると・・・？しかも、亭主のヤンは外での仕事が忙しいから、アントニーナを構うことができないとなると・・・？

本作は女性監督の演出だけに、露骨にヘックの（性的）欲望を表に出さないが、アントニーナにはそんな危険がいっぱい。さあ、アントニーナはそれをいかに振り払うの？しかし、時には地下のユダヤ人たちが立てた音をごまかすため、アントニーナの方から抱擁を求めたり、場合によればキスを求めるような態度を示すことも・・・。しかし、そりゃちょっとヤバイ。アントニーナのそんな態度を、もしヤンが目撃すれば、ヤンの気持ちは・・・？

■□■戦況の展開は？ソ連軍は？強制収容所は？■□■

今になれば、ポーランドに侵攻し、電撃作戦を開始したナチスドイツが、その後次第に劣勢になったことは誰でも知っている歴史的事実。しかし、侵攻されたワルシャワの住人たちがゲットーに収容されたユダヤ人たちにそれがわかるはずはない。つまり、彼らは情報から完全に遮断され、何の希望を持ってない中で、日々の生活を送らざるを得なかったわけだ。しかし、その後の情勢の変化は？ナチスに抵抗するポーランド人民の内部蜂起は？ソ連軍の東からの反抗は？そして、ナチスドイツの撤退は？他方、次第に強まっていくゲットーから強制収容所へのユダヤ人の輸送状況は・・・？

本作は、時系列に沿ってそのことを少しずつ（程よく？）説明してくれるが、そこで私が納得できないのは、後半に至って、銃を持ったヤンがナチスに立ち向かっていること。これも本当に<BASED ON A TRUE STORY>なの？また、スクリーン上では銃に撃たれて倒れてしまうヤンの姿が登場し、その後戦争終結に至るまで行方不明になっているから、ヤンの生存は絶望的・・・？

本作後半はそんな展開になるが、そこで私がさらに納得できないのはアントニーナがヘックに見せる態度。ヤンが行方不明になったのは仕方ないし、アントニーナが何とかヤンの情報を得たいと願うのは当然。そして場合によれば、たとえそれが死亡確認情報でも無いよりはマシ。それが正直なアントニーナの気持ちだったことも理解できる。しかし、その情報を得るため、アントニーナが積極的にヘックの元を訪れるのは如何なもの・・・？ナチスの敗北が近づく中、ヘックもベルリンへの撤退の準備をしていたが、ただならぬアントニーナの訪問に対応する中、長い間隠されていたアントニーナたちの隠れた狙いを知ることになると・・・。

■□■ラストもホント？映画としては少し甘いのでは？■□■

本作は中盤のスリリングな展開が最大の見せ場で、手に汗を握る緊張シーンが続いていく。しかし、ナチスドイツの敗色が濃くなる後半では、ヤンは既に死亡してしまったようだし、ヘックは撤退していただけだから、動物園での業務もほぼ店じまい・・・。そんな展開になっていく。しかし、そこに登場する前述した私には少し納得できないアントニーナのヘックに対する行動のため、ある意味で無用な混乱が生じ、ヤンやアントニーナの一人息子の命も「あわや！」という危険にさらされることになる。私はその展開は「映画としては少し甘いのでは？」と思わざるを得ないので、その展開はあなた自身の目で確認してもらいたい。

さらに、それに輪をかけたのが、終戦後動物園を再開したアントニーナのもとに、死んでいたはずのヤンが無事に戻ってくること。このハッピーエンドも本当に<BASED ON A TRUE STORY>・・・？そして、これも映画としては少し甘いのでは・・・？

2017（平成29）年12月28日記